

## 平成28年度 シンポジウム 開催報告

こころをつなげて、四国はひとつ

### 「四国遍路を世界遺産に」国際シンポジウム

- 日時 平成29年3月18日(土) 13:00~16:40
- 場所 ホテルクレメント徳島(徳島県徳島市寺島本町西1丁目61番地)
- 内容
- 文化庁報告  
「近年の世界文化遺産の動向」  
下田 一太 氏(文化庁記念物課世界文化遺産室文化財調査官)
  - 記念講演  
「シルクロードの世界遺産登録への経験から」  
郭<sup>グオ</sup>旃<sup>チェン</sup> 氏(前ICOMOS(国際記念物遺跡会議)副委員長)  
「四国遍路と熊野古道」  
林 雅彦 氏(明治大学名誉教授)
  - パネルディスカッション  
「四国遍路の世界遺産登録に向けて」  
コーディネーター 清水真一 氏(徳島文理大学教授)  
パネリスト 郭<sup>グオ</sup>旃<sup>チェン</sup> 氏(前ICOMOS(国際記念物遺跡会議)副委員長)  
本中 眞 氏(内閣官房 内閣参事官)  
林 雅彦 氏(明治大学名誉教授)  
大石雅章 氏(鳴門教育大学理事・副学長)
- 組織 主催 「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会  
四国遍路・熊野古道連携事業協議会  
協力 NPO 法人遍路とおもてなしのネットワーク

#### ■概要

「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会は、四国遍路・熊野古道連携事業協議会と協力し、平成29年3月18日(土)にホテルクレメント徳島のクレメントホールにおいて世界遺産登録に向けた国際シンポジウム「四国遍路を世界遺産に」を開催し、当日は約200人が参加した。

国に向けての世界遺産暫定一覧表記載資産の提案から10年を迎え、これまでの四国の取組みと現状について報告を行うとともに、シルクロードや世界遺産登録10周年を迎えた熊野古道(「紀伊山地の霊場と参詣道」)について二つの記念講演を行い、「道」に関わる資産との比較を通して、四国遍路の特色や、その価値を伝える有形・無形の構成要素などについて、海外の専門家を交えて意見交換が行われた。



## ■ 関係者挨拶



「四国八十八箇所霊場と遍路道」  
世界遺産登録推進協議会会長  
千葉 昭（四国経済連合会会長）

本協議会の千葉昭会長は、「四国遍路を取り巻く環境が江戸時代から大きく変わり、スタイルも多様化してきたなかで、今も年間15万人とも言われる巡礼者が四国を巡っているのは、変わらない何かを四国遍路が持っている証し」と語り、この宝を大切に保存して世界に向けて発信し、次の世代へ引き継ぐことこそ、四国に生きる我々の責務と思うと挨拶した。

徳島県の飯泉嘉門知事は、ビデオメッセージで平成28年8月8日に国内暫定一覧表記載に向けた提案書を文化庁長官に提出したことを報告。「顕著な普遍的価値の証明」と「資産の保護措置の充実」という課題の解決に向けた取組みの重要性を述べ、「シンポジウムをキックオフとして、暫定リスト記載への歩みが進み、四国遍路の文化が世界に発信されていくことを期待したい」と挨拶した。



「四国八十八箇所霊場と遍路道」  
世界遺産登録推進協議会副会長  
飯泉嘉門（徳島県知事）

## ■ 報告

### 「近年の世界文化遺産の動向」

文化庁の下田一太調査官から、世界遺産をめぐる近年の動向などについて報告いただいた。

世界遺産の条約採択から45年が経って登録数は1,000件を超え、保護の面からは憂慮される事態になっている。締結各国には自発的な推薦の自粛が求められ、世界遺産委員会でも審査件数を制限するなどの動きがみられるという。

四国遍路の場合、世界遺産登録に必要とされる真実性については「巡礼路が活性を帯びた時期など、価値が最も高くなった時代を設定するか、あるいは過去から蓄積されたもの全体を価値と設定する方法もあるかもしれない」と検討の必要性を示し、完全性については「88ヶ寺と遍路道全体が望ましいが、その中でどう設定し、全体の何割なら説明できるのかという理論構築が必要」と語った。また、ユネスコが地域住民との関わりを重要視していることに触れ、「接待や生きて継承される文化が重要な要素となる四国遍路では、地域住民の理解と参画も登録への大切な必要事項になる」と指摘した。

今後、国内の世界遺産に何を加えるのかを考えるには、日本文化の代表性を示すグランドデザインのようなものが必要であり、例えば歴史軸で見ると暫定一覧表候補の資産は近世に集中しているという。そのため、時代も含む様々な視点から「他の資産と重複や競合をしない形で、どのようにデザインしていくのかを考えることも必要になる」と語った。世界遺産登録までには非常に長い時間がかかり、登録された後も良い面だけでなく苦難の道もあることを前提とした上で、「長い視野で検討し、理解した上で世界遺産の推進を考えてほしい」と結んだ。



文化庁世界文化遺産室 文化財調査官 下田一太 氏

## ■ 記念講演

### 「シルクロードの世界遺産登録への経験から」

前 ICOMOS 副委員長の郭旃氏から、シルクロードの世界遺産登録に関わった経験を踏まえて、四国遍路の今後の取組みの課題などについて講演いただいた。

世界遺産において、「文化の道」という概念が国際社会から支持され、複数の地域で共同申請をする数も増えてきている。シルクロードでは、中国、カザフスタン、キルギス共和国が共同し、複数のサイトをつなぎ合わせるシリアルノミネーションの手法をとって、シルクに代表される物産や文化などの交流を促した機能的な一体性を価値としたという。世界遺産登録のためには、資産について比較研究をし、人類史における特異性や唯一性を探る必要があるが、シリアルノミネーションの場合、「1 + 1 の価値が 2 よりも大きくなることに注目してほしい」と語り、四国でもこの手法について検討するよう提言した。

四国遍路については、シルクロードなどの交易路とは異なる「修行の道」であることが独自性となる可能性を指摘し、今後の取組みに必要となる主題について、「札所や遍路道のほか、地域に育まれたお接待の文化があり、それらを複合的に重ねていくことでより豊かな主題が形成できるのではないかと思います」と語った。主題の確立により、今後、四国遍路のさまざまな要素、中身、道路等のインフラのほか、地域社会や村の発展、建造物等に対してどのような影響を与えていったかなどが見えてくるようになるという。最後に、世界遺産に登録されると観光業が活性化する傾向があるが、それだけではなく、「一番の目的は次世代に資産を伝えていくこと」と語り、四国の取組みへの協力を約束して講演を結んだ。



ICOMOS 前副委員長 郭旃氏

### 「四国遍路と熊野古道」

明治大学名誉教授の林雅彦氏から、熊野についての研究成果を踏まえ、四国遍路との共通点や違いなどについて講演いただいた。

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録された後、明治大学は行政と協力して熊野に関する学会やフォーラム等を開催し、東京など関心の高い地域で情報発信を行ってきたが、地域について考える際に「地元とは別の場所と連携して取り組むことも大事」と語った。

熊野にある青岸渡寺は西国巡礼の 1 番札所であり、『寺門高僧記』など室町時代の文献に熊野詣でや西国巡礼の詳細な記述が確認できるが、江戸時代になると街道の整備や蹄鉄技術の向上、手形の両替制度などが整い、熊野詣でが隆盛していく。四国遍路と熊野古道について考えると、共通して「へち」、「へんろ」という言葉があり、熊野詣でや西国巡礼を終えた後、四国にお参りするようなことも行われていたという。澄禅が著した『四国遍路日記』等の記録には、焼山寺や石手寺など四国の複数の札所に熊野社の記述があり、山伏・修験者たちがやってきたことを想像させるが、四国遍路の成立説にも衛門三郎や弘法大師などと並んで熊野先達草創説があり、その正誤は別として「熊野が少なからず四国遍路に影響を与えたと考えられる証はある」と説明した。

最後に、松山市内で行われている衛門三郎伝説の絵解き事例を紹介し、熊野詣での場合は熊野比丘尼が全国で絵解きすることで普及するなど熊野三社を中心とする宗教組織が関与していたことから、「庶民によって作られた四国遍路と、熊野比丘尼による絵解きが大きく影響を与えた熊野詣では大きな違いがある」と指摘した。



明治大学名誉教授 林雅彦氏

## ■ パネルディスカッション

### 「四国遍路の世界遺産登録に向けて」

講演等を踏まえ、本中眞氏と大石雅章氏が報告をしたうえで、活発な意見交換が行われた。

内閣官房内閣参事官の本中眞氏は、四国遍路がお接



左から、パネリストの郭 旃氏、林雅彦氏、本中眞氏、大石雅章氏

待などに支えられた近世の庶民信仰であることについて、「説明の工夫が必要だが、重要な部分と思う」と述べ、登録基準iii（現存する文化的伝統に関する独特な証拠を伝えるもの）の証明が決め手になるとともに、高野山等と区別しながら弘法大師との関係もしっかり説明していく必要があると提言した。また、霊場や遍路道を日本人の風景観の発展過程の中でどう位置づけるかという観点から検討する必要性も指摘し、「世界遺産化を目的とするのではなく、プロセスを糧にして共有することが大事」として、時間・労力・経費が不可欠と認識したうえで、専門の人材を育てていくことも視野に入れながら取り組んでほしいと語った。

鳴門教育大学副学長の大石雅章氏は、空海修行の地を僧が廻っていた四国辺地が、江戸時代には88の札所を巡る民衆の四国遍路へと変化し、それを支えた地域の人々の伝統がお接待文化として定着してきた歴史を紹介。札所に大師堂が整い、道沿いに道標や遍路墓が建つなどして四国遍路の景観が形成され、文書類からは最後に生きる場として四国に来た人たちの存在や埋葬などのお接待も行われていたことなどがわかるという。チェックポイントとしての札所や納経帳などは、「民衆が信仰を確かめるための仕組みだったのではないかと指摘し、「修行と巡礼の重層構造をもち、庶民レベルで形成されているところに四国遍路の特徴がある」と語った。

林雅彦氏は、四国遍路の特徴として、周回式の巡礼であること、教団が関わらず庶民中心で修行の道を歩いたことの二つが考えられ、一方で熊野にも善根宿があったほか、何度も詣でた例があり、回数が多いほど功德があるという考え方が四国遍路と共通することなどをあげた。また、四国遍路の歴史や特徴を検討していくために、「四国遍路の学会を作り、長期的に勉強していくことが世界遺産登録につながるのではないかと提案し、地元での新たな学会設立に期待を寄せた。

郭旃氏は、四国遍路のように最終目的地がない回遊型巡礼で、長い歴史があり、修行を目的とする文化の道は世界でも例がなく唯一性があると評価し、特徴を反映させるため「タイトルに『遍路』という言葉の響きをそのまま入れても良いのではないかと提案した。また、物証である寺の建立年代を正確に書き、後世の補修があればそれも記録していくのが真実性を示すうえで重要という。登録の推進は長期にわたる困難な仕事だが、そのプロセスは地域の人々が故郷を見直す契機になると語り、「自分たちが自信をもって故郷の魅力を世界に発信する取組みなので頑張ってほしい」とエールを送った。

コーディネーターの清水真一徳島文理大学教授は、四国遍路では立派な建物より巡礼やお接待などの



コーディネーターの清水真一氏

行為を想起することが多く、他の資産と比べて無形的な意味合いが強い特徴があると指摘。本中氏からも発言があったように、無形の要素は大事だが法的保護に馴染みにくいため、何らかのルールを共有し、「多様なスタイルを大事にしつつ、遺産としては修行の要素を残す歩き遍路の時代を目標として遺すのがよいのではないかと語った。最後に、「大切なのは私たちが何を残し、伝えたいのか、その原点に返って取り組むこと」として、地域の人々に応援を呼びかけた。